

友情の効用：小林秀雄と火野葦平

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 五味渕, 典嗣 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6086

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



友情の効用

——小林秀雄と火野葦平——

五味 潤 典 嗣

1 はじめに——問題の所在

山城むつみの新著『小林秀雄とその戦争の時』『ドストエフスキイの文学』の空白（新潮社、二〇一四）は、小林が従軍記者の資格で初めて中国に渡った際の現地報告「杭州」（『文藝春秋』一九三八・五）、「杭州から南京」（『文藝春秋臨時増刊』一九三八・五）、「蘇州」（『文藝春秋』一九三八・六）に強い関心を寄せている。山城は、現地の「慰安所」に関する記述が問題視され、検閲による削除処分を受けた「蘇州」初出形の復元を試みる一方で、いまだ戦火の傷痕が生々しく残る中国の地で小林は、「内地の時間」と「戦地の時間」の落差にとまどい、戦場を日常として生きる者たちが呼吸する「空気」とじかに触れ合ってしまったのではないかと書き記す。想像以上にあっけなく人間は戦場の暴力に適応し、迷いも屈託もなく他者を傷つけ、殺す。小林は、そんな「ど強い」情景と「空気」に泥む中で、「本人自身、その意味を不断に誤解し続けたかも知れない無意識の変化」を経験してしまったのではないか。そう考える山城は、戦時下におけるドストエフスキー論の杜絶と敗戦後の再起筆に着目、戦争と責任をめぐる小林なりの思索を読み込もうとする。

こうした山城の著書が、あくまで小林のテクストと、その内側に穿たれた空白に寄り添おうとする重厚な批評であることは疑えない。しかし、山城が問わなかったことがひとつある。なぜ小林がそこにいたのか、ということだ。

戦時下の文学・文化を考える者にとって、〈小林秀雄と戦争〉という問いは、いまなお巨大な謎であり続けている。近年では、森本淳生『小林秀雄の論理 美と戦争』（人文書院、二〇〇二）の所説が重要だろう。戦時期の小林のテクストは決して一時的な例外ではなく、むしろ「小林が確信をもって完成させた批評が状況に対して奇妙なまでに親和的になった」理由を考えるべきとする森本は、この時期の小林秀雄は、「戦争」を状況の中で苦闘する個々の兵士の「個人的な体験」と局限して捉えた上で、人間にとつての「戦争」を「表現行為」として描出した、とまとめている。そうなれば「戦争」は、もはや政治や社会の問題ではないし、ましてや思想的な問題ですらなく、動かしがたい「必然」であるところの「現実」をいかに生き死ぬのかという、文学の問題となる——。確かに森本の提論は、一九四一年一月八日以降の小林のテクストの論理を明快に説明してくれる。しかし、ここでもまた、先の素朴な問い——なぜ彼はそこにいたのか？——は問われないままなのだ。

山城や森本の精緻で力強い仕事は、小林秀雄の言葉に徹底して内在的に思考することで、その論理を読み抜こうとする姿勢に貫かれている。だが、まさにそうであるがゆえに、小林のテクストが持つてしまった同時代的な問題性という観点に欠けているのではないか。確かに小林は、しばしば思想家として遇される。彼のテクストにはそれに相応しい強度があるし、ある時期以降、当の小林も積極的にそう振る舞おうとした形跡さえある。しかし、本質において小林は批評家である。他者の言葉と出会い、他者の言葉と共に思考する批評家である。とすれば、より徹視的な視点から、小林が同時代のような言説を意識し、誰に向かって発話していたかを具体的に検証する作業を疎かにすべきでない。同時に、そんな小林が投げかけた言葉の行方を見定めることも必要だろう。

そこでわたしは、日中戦争が本格化・全面戦争化した初期の小林の発言について考えるために、火野葦平という補助線

を導入したい。知られるように、一九三八年の小林の中国行が、杭州の占領部隊にいた火野葦平に第六回芥川賞を授与するためだった。しかし、小林は文藝春秋の社員でもなければ芥川賞の選考委員でもない。しかもこのとき小林は、一度はとりやめた従軍を「やむを得ず引き受けたのではなく、志願」(山城)^①したのだった。すなわち彼は、たんに中国の戦地を見ようとしただけではない。戦地の火野葦平に会いに出かけたのである。

一方、小林秀雄との出会いは、火野にとつても(恐らくは小林以上に)大きな意味を持っていた。この時点での火野は、さまざまな(期待)を集めていたとはいえ、いまだ芥川賞を受けたばかりの新進作家でしかなかった。その芥川賞決定にも、多分に文春側の「興行価値」(菊池寛「話の屠籠」『文藝春秋』一九三八・四)的な狙いが見え隠れするが、そのことを知らぬではなかったはずの火野は、プレゼンターとして小林がやってくると聞かされ、思わず手帖に「えらい奴が来やがったな」と書きつけてしまっていた。このときの彼らには、それだけのキャリアの差があったということだ。^②にもかかわらず、小林は「二人は直ぐ旧くからの友達の様になった」(「杭州」と書いた。これは、初対面の記憶を語る際にありがちな空疎な社交辞令ではまったくない。河上徹太郎は、中国から戻った小林が「おい、火野葦平っていい男だぞ」と口にしたと回想している。^③高見澤潤子は、「昭和十四年頃」のこととして、質問に訪れた若い女性たちに「今の小説は実に読むべき価値がない」と言った小林が「火野葦平なんかの作品はよんでもいい」と語っていたことを伝えている。^④しかも小林は、やがて火野の次作『麦と兵隊』(『改造』一九三八・八)の熱心な推奨者ともなるだろう。ではいったいなぜ小林は、「火野葦平」という存在に心を動かされたのか。火野との出会いは、戦地での小林の見聞や観察に、どんな影を落としたのか。そして火野葦平は、当代随一とされた批評家から何を学び、何を受け取ったのか。

現在、北九州市立文学館に寄託されている火野葦平関連資料には、小林秀雄からのものを含め、戦地で火野が受け取った書簡が多く残されている。また、同じ資料内の火野の「従軍手帖」には、ごく断片的なものではあるが、一九三八年三月二七日の陣中授与式当日の様子が書き留められている。本稿でわたしは、それらの資料も参照しながら、二人それぞれ

にとつてのこの「友情」の意味について考えたい。彼らの親交が、たんなる個人的な親愛にとどまらない波紋を同時代に惹起してしまったと思うからである。

なお、本稿が取り上げる小林の現地報告テキストには、大幅な改稿があることが知られる。ここでは、テキストの同時代性を重視する観点から、原則として初出本文を採用する。削除処分を受けた「蘇州」については、単行本『文学Ⅱ』（創元社、一九四〇）所載の本文を参照し、補うこととする。また、同様の観点から、中国の地名表記については、同時代の日本語メディアで通行していたものを用いた。

2 文学（者）の領土

一九三七年二月三日付けの『読売新聞』に寄せたエッセイの中で、小林秀雄は「従軍記者になりたくて、文藝春秋社に頼みやつてもらう事に決つたが、お袋があまり心配するので心を翻えして了つた」と書いた（不安定な文壇人の知識）。母親が心配するのも無理はない。時期を考えれば、小林は上海戦に次ぐ激戦・乱戦となつた南京戦か、その直後の時期に従軍を企てたことになるからだ。ちなみにこれは、中央公論社から特派された石川達三の従軍と前後するタイミングである。（石川は一九三七年二月二九日に東京を出発、一月五日に上海入りしている）。⁶一方で小林は、戦時下の権力による検閲の強化についても積極的に発言している。その石川が『生きてゐる兵隊』（『中央公論』一九三八・三）で発禁処分を受けた際には、いちはやく「急速に延びた言論統制の手」に対する危惧を表明し、自らの「蘇州」が削除処分となつた際には、ちょうど処分発表当日から始まつた連載の中で、やや開き直り気味に応答している（支那より還りて）『東京朝日新聞』一九三八・五・一八〜二〇。⁷

実際の小林の従軍行は、一九三八年三月下旬から約一ヶ月間にわたるものだった。決して長い期間とは言えないが、た

んなる視察や見物だけなら、これだけの時間は不要だろう。詳しくは後述するが、実際に彼は相当の危険を冒して動きまわり、戦時下の中国を注意深く観察している。その自負からか、小林は、帰国後に「戦跡見物ぐらいで人間の思想が新になるなぞという馬鹿げた事はない」と断言した上で、「文壇の一隅について考えあぐねた自分の孤独な思想が、意外な根強さを持っている事を発見して大変気持がよかった」と書いた（『雑記』『文学界』一九三八・六〇）。同様の認識は、次のようにも言い換えられている。「平和時に文壇の一隅で独り考えて来た事が、異常な事柄を見たり聞いたりしても少しもぐらつかなかった事を発見して気持よく思い、自信が出来た様にも思った」（『支那より還りて』）。じつは小林は、戦地で彼自身にさえ「異常」と観取されたことがらを現実的に「見たり聞いたり」してしまっていた。そのうえで、それでも自分は本質的に、変わっていない、と行為遂行的に言明しているのである。

だが、そうした言葉とは裏腹に、小林の議論のシフトは、中国行の前後で明らかに変化している。それは山城むつみが言うような、自覚されざる内的な変化ではない。端的に言つて、〈戦争を書く〉行為への評価が決定的に変わってしまっているのである。

時系列を追って確認しよう。同時代の戦争にかんする小林の最初の発言は、『東京朝日新聞』のコラム「槍騎兵」に寄せた短文「戦争と文学者」（一九三七・一〇・一六）である。華北では河北省の石家荘・内蒙古の綏遠にまで戦線が延び、華中では上海での激烈な市街戦が報じられていた頃のことである。

戦争と文学者についていろいろな感想や論文を読まされる。戦争だからといって文学者の任務に変わりがある筈がない。飽くまで冷静に批判的に戦争に処すがよい、そういう意見が悪かろう筈がない。併し自分は戦争について兎や角いつているが、生れてから戦争なぞ一ぺんも実地に経験した事はないのだ、という事を忘れては駄目である。

俺は生れてから恋愛というものをやった事はないが、恋愛というものはこういふものであると言つたら笑われるだら

う。戦争だって同じ事だ。戦争についてあまり何もかも心得た風な口のき、方は滑稽なのである。

松本和也は、盧溝橋事件直後の文学者による「報告文学言説」の問題系を整理しつつ、「戦場との距離」を関数とした作家の「人間(性)」——「当事者性」と呼ぶべき論点」がゆるやかに共有されていた、と指摘している⁽⁸⁾。小林の発言も同様の言説圏にあると見てよいが、戦争の体験を「兵士一人ひとりが戦場の困難を乗り越え任務を遂行するさいに生きる個人の体験」(森本淳生⁽⁹⁾)に還元する小林が、戦場の当事者性をほとんど絶対化していることに留意しておきたい。戦争がいくら高度化複雑化しても「言語を絶した人間の異常な営みである事に变りはない」。「恋愛」でさえ経験しなければ語れないなら、戦場の他者がその「異常な営み」を語れるわけがない。小林は、体験と表現の断絶を極端に強調することで、文学者が安易に戦争を書くことを抑制しようと働かかけているのだ。

実際、この時点での小林は、戦争にかかわる言説一般に対して基本的に冷淡である。『文学界』一九三七年一〇月号の編輯後記では、「日支事変が拡大し、新聞雑誌は悉く編輯上の大革命を強制されている」にもかかわらず、「本誌だけがまことに平和な恰好で出る」といささか誇らしげに書いている。翌月の編輯後記でも、第一次大戦期のジツドの言葉を引きながら、「事変」をめぐる報道合戦を冷ややかに一瞥している。

小林のこうしたスタンスは、少なくとも従軍前までは揺るがない。一九三八年一月の「文芸時評」では、「文学の世界に事変は起っていない」と静かに言い切ってしまった。「ラジオも新聞も一変して了った」し、「評壇の様子もまるで変ってしまった」が、独り「小説壇だけが依然として変わらない」。だが、これが相当に偏った認識であることは指摘するまでもない。『中央公論』一九三七年一〇月号の林房雄「上海戦線」・尾崎士郎「悲風千里」以来、従軍作家の現地報告の類は少なからず発表されていた。注文すれば何でも整理してくれる大宅壮二は「事変ルポルタージュ批判」(『改造』臨時増刊、一九三七・一一)で、文学者のうち誰がどこに行きどんなことを書いたか教えてくれる。加えて、出征する兵士が「畜生、

行けない奴は陽気でいやがる」と吐き捨てるさまを書き入れた徳田秋聲「戦時風景」(『改造』一九三七・九)を嚆矢として、戦時下の日常を描く小説も少なからず登場していた。『文学界』一九三七年二月号で小説月評を担当した林房雄は、「銃後にも戦争はある」のだから、文学者は戦争に行かずとも立派に従軍記者たりうるという武田麟太郎の言葉を引きながら、川端康成「高原」(『文藝春秋』一九三七・一一)「風土記」(『改造』一九三七・一一)、中野重治「原の襷」(『文藝』一九三七・一一)に触れている(「戦争と文学者」)。だが、「戦争と文学に関する幾多の感想や評論」「多くの従軍記の類」は「文学の本質部」とほとんど関係がないと確言した小林秀雄は、自ら担当した一九三八年一月・二月の文芸時評で、『文学界』で処分対象となった石川淳「マルスの歌」(一九三八・一)を含め、こうしたテクストの一切をほぼ完全に無視している。

そんな小林の立場を最も集約的に表現したエッセイが「戦争について」(『改造』一九三七・一一)である。「僕は事変のニューズ映画を見ながら、こうして眺めている自分には絶対に解らない或るものがあそこに在る、という考えに常に悩まされる」という一節は、メディア環境の激変による戦争イメージの爆発的な増大が、戦場の当事者性を埋め合わせることは決してないという意味だろう。「誰だつて戦う時は兵の身分で戦う」のだから文学者として戦うなどナンセンスだという有名なくだりの後には、「文学は平和のためのものであつて戦争の為にあるのではない」という文字が続く。これは、時としては相当に思い切った発言だとわたしは思う。しかもかなり危うい論法である。誰もが「兵の身分」で戦う軍隊など歴史上に存在したことはないからだ。しかし、そこから小林は、「文学者たる限り文学者は徹底して平和論者である他はない」というテーゼを導き出す。もしそうなら、戦時下の文学とは、それ自体が名辞矛盾をはらむことになるのだが、「僕は、この矛盾を頭の中で片付けようとは思わない」。小林は、「聖者でも予言者でもない」「たゞの人間」として、この矛盾と向き合おうと声明しているわけだ。

こうした議論が、どうかして文学の本来性を戦争から切り分け、平時と変わらぬ文学(者)の領土性を確保しようと試

みていることは明白だろう。しかも「戦争について」の小林は、戦場に赴く人々のことを忘れていない。人間は歴史的な被拘束性から自由にはなれない。ひとはつねに（いま・ここ）の現実から出発する他になく、なればこそ「その時代の人々が、いかにその時代のたつた今を生き抜いたかに対する尊敬の念を忘れては駄目である」。実際問題、一九〇二年生まれの小林にとって、戦場への動員は決して他人事ではなかった。¹⁰この時代の「日本に生を享けている限り、戦争が始まった以上、自分で自分の生死を自由に取り扱う事は出来ない」。この決定的かつ具体的な現実を、つまりは自らも戦場に立つ可能性を、切実かつ切迫した問いと考えるところから出発すべきである、ということ。小林がこのエッセイを書いた時点で、この戦争が長期化するという見通しのもと、これほどの覚悟で筆を執っていた論者がどれだけいたか。自分の言葉の受け取り手が、すぐにでも戦場で銃を執るかもしれないという緊張感を持って書いていた論者が、いったいどれほどいたか。

だから、ここでも小林は正論家である。しかし、時として〈正しさ〉は、間違ふことへの怯懦や、大勢に対する順応・従属を意味してしまうことがある。このときの小林の〈正しさ〉も、実はそのようなものではなかったか。それぞれに事情も葛藤も言いたいこともあつたはずなのに遅疑なく戦場へと向かつた人々のことを忘れまいとする姿勢は、確かに〈民衆〉の側にあつたと評価することはできる。しかし、同時にそれは「戦争への批判的考察」を封印した「極端な現状追認論」（森本淳生⁸）に陥ることを意味してもいた。

従軍行以前の小林は、文学と戦争とを本質的な部分で相容れないとすることで、戦争にかかわらない文学が書かれ続けることを肯定し、その場所を守ろうとしていた。その区分けの根拠となり、戦争をめぐる饒舌を禁止する言説上の資源として持ち出されたのが、直接的な戦場体験の当事者性という問題だった。なるほど、経験してもいないことをむやみに語るべきでないというのは、それなりに有益な処世訓ではあろう。だが、いま小林秀雄の目の前には、地域の同人誌作家だったとはいえ、文学の場から応召し、自ら銃を執り手榴弾を投げて、戦場の当事者となつた人間がいる。一人の下士官として戦場の暴力を生きた文学者があらわれてしまったのである。

言うまでもなく、火野葦平その人のことである。

3 それぞれの戦場

鶴島正男が翻刻した火野葦平の従軍手帖（「杭州1」）によれば、火野が小林の来訪を知ったのは、芥川賞授与式が行われた一九三八年三月二十七日朝のことだった。

●小林秀雄氏に中隊本部にて会う。新聞記者などたくさん来ている。十時半より授与式。小林、挨拶する。一寸、面くらったらしく、ふるえとる。こっちも挨拶。賞品をくれる。終わる。

金はおいて来たという。二階に上り、ビールのむ。よい男なり。いろいろ、東京のこと、文学のこと、文壇のこと、など話す。昼頃、出て、家にかえり、「糞尿譚」を小林にやる。小林の宿舎に行き、報道部の自動車にて、拱宸橋に行く。山崎少尉を誘ってゆく。人力車にてかえる。酔っぱらい、さかんに文学の話をする。「君は傑作を書くよ」と小林いう。ほんとか。「略」六時という約束だったので、もう、皆、相当に酩酊している。大同旅館の女二人来ている。あんまり面白くないので、二人で出て、支那Pのところへ、上りこみ、ごそごそしていたら、小林居なくなってしまう。かえる。¹²

小林の予言を半信半疑で聞いた火野の表情が目につかぶが、この「支那P」は中国人の〈慰安婦〉と見て間違いない。『出版警察報』一一二号（一九三八年四月六日分）は、「蘇州二設ケラレタル慰安所ト称スル軍閥係ノ淫売所ヲ露骨ニ紹介したかどで削除処分とした小林「蘇州」の問題箇所を摘記しているが、その中に「杭州では火野伍長から切符を分けて貰っ

て登楼した」という一節がある。おそらくこの時のことだろう。また、小林は明確に書いていないが、この後二人は上海でもう一度顔を合わせている。星加輝光が発見した『上海日報』の記事（一九三八・四・九）によれば、「僕は今書きたい。欲求で一杯だ、この従軍中に千枚位書きたいと思う」と意気軒昂な火野に向かって、小林は「君はこの際あせることはない。しっかりとしたものを書き給え」「量よりは質を選べ」とたしなめていたという¹³。だが、小林が描く「火野葦平」は、その記事の印象とは少し違うものだ。

冒頭から「真ッ暗な廢墟の様な街に、自分の靴音だけが、大きな音を立てる」という場面から起筆される小林「杭州」は、いかにも不穏な雰囲気漂わせるテキストである。まず上海に到着した「僕」は、他の「従軍記者」たちになじめずに、寄る辺ない浮遊感と現実感の稀薄さに苦しめられる。そんな違和感を拭えぬまま、杭州での授与式でどうにか役目を果たし終えた「僕」は、満天の星空が水面に映る西湖に「火野君」と船を浮かべる。文字通り夢のような、「たゞ春闈という一語を作っている様」な光景に包まれながら「火野君」は、静かに、つぶやくように、戦場での体験を語り出す。そのうち、初出『文藝春秋』版以降削除された捕虜殺害のエピソードが、火野自身が敗戦後に『土と兵隊』に加筆した内容とほぼ一致することは、山城むつみが指摘した通りである¹⁴。

だが、むしろわたしが注目したいのは、「火野君もあまり戦争の事は書きたくないらしい」とした小林が書き留めた次の言葉である。「わしは当分何も書かんぞ。戦争をした者には戦争がよくわからんものだ」。そして、初対面の印象を「情熱的な眼付きをした沈着な男」と表現された「火野君」が、あたかも日本軍人の代表¹⁵象徴であるかのように表象されている点である。

副田賢二は、日中戦争期の言説の場では、軍隊組織に所属した者（「属軍者」）とそうではない者（「従軍者」）とが差異化されており、戦場との距離を強調する「従軍者」の言説が「属軍者」の発話を欲望し権威化する構造があると論じた¹⁵。日中戦争にかんする小林秀雄の議論が、「戦争」を個の戦場体験へと還元するものだったことはすでに述べたが、軍人だけ

ら、戦闘の当事者だから、「戦争がよくわか」るわけではない。それは別に日本軍隊における火野葦平＝玉井勝則の階級や、作戦行動における所属部隊の位置づけという問題ではない。結局のところ人間を軍事組織にとつての駒としか見ない近代軍隊において、個々の戦場体験は、つねに局所化された限定的なものでしかないからである。しかも、記憶と言葉を噛みしめるように、たどたどしく自己の体験を語る「火野葦平」の寡黙さは、戦場における暴力の究極の当事者が死者に他ならないことを、読む者に強く印象づける。いってみれば、生き残った者の戦場体験の語りは、二重の意味で周縁化されて位置づけられるのである。戦闘時の極限状況と異様な集中心力について語る「火野君」が、いかにも質朴で抑制的な人間と造型された点も重要だ。なぜなら、先の論理に従えば、戦場体験の語りは決して饒舌であつてはならず、ある種の倫理性を感取させるものであるべきはずだからである。小林の現地報告テキストに登場する軍人ではない日本人たちの類魔的な姿は、そうしたイメージをより際立たせることになるだろう。

以上のような論理を構築した上で、小林は、決して戦場の中心には迫れない存在として、戦地ではあるが後方でもない、とはいえ直接の戦場というわけでもない曖昧な場所を、徹底して描いていった。しばしば誤解されるが、彼は怠惰な従軍記者ではまったくくない。そもそも出発前から小林は、自ら司会を務めた座談会で、北支から戻った岸田国土が「僕は、日本人がどんなに勇敢に戦い、正義の旗印をかかげても、ちよつとしたやり方で、支那民衆の感情を踏みこむようなことがないかどうか？ それをはらはらしながら見て居った」とためらいながら語っていたことを聞いていた（『支那を語る』『文学界』一九三八・一）。また、まったくの偶然だが、小林が上海に入った一九三八年三月二四日は、上海の中国語紙『大美晩報』に『生きてゐる兵隊』中国語版抄訳が掲げられた直後だった。「日軍空前受重創」という「宣伝」の文字が躍る『大美晩報』を手にとつたと明記した小林が、石川のテキストのことを知らないはずはない。加えて、「杭州より南京」には、「南京の所謂難民区という特別の区画」についての言及がある。これは、ドイツ人ジョン・ラーベが代表を務めた南京安全区国際委員会のことだろう。だから小林は、南京での一連の出来事についても聞き知っていると考えてよい。なれば

こそ彼は、南京の「人々の眼差しの相違」を気にせずにはいられない。通訳も護衛も連れないうで「車夫に裏街の狭い道ばかり歩かせてみたり、腕章をとって車夫と一緒に汚い茶店で茶を飲んだ」りするのほそれなりの覚悟が必要だったと思うが、そこまでして彼は、南京の人々の「眼付き」を心に焼き付けている。さらに小林は、討伐に行った先で逆に「敗残兵」と誤認されるほど見すばらしい格好の日本軍兵士の姿を点綴し、少なくとも杭州と蘇州の二箇所、日本軍慰安所を實現している。

帰国後の小林が、文学者の積極的な戦地派遣を提唱するのは、こうした言説実践を踏まえてのことである。「支那より還りて」で小林は、「政府当局者は、何故文学者の渡支について積極的な援助を惜しんでいるのだろうか」「観察にも文章にも熟達した一流文学者を続々とたゞぶらりと支那にやってみるがよい」と書き記す。確かに「ぶらりと行ってぶらりと還つて来た文学者達は、別に新説を吐かないかも知れない」。だが、文学者たちは「日本人として今日の危機に関する生々しい感覚」だけは体得してくる。それはやがて「彼等の書くもの」にあらわれ、「国民」にもしかるべく感得されるはずだ、と言うのである。

まず第一に、こう書く小林において、従軍前の〈文学の領土性〉にかかわる主張がすっかり消えていることを確認しよう。小林は、戦地から戻った文学者が戦争のことを書くとは限らないとしているが、べつにそれを禁じているわけでもない。これは明確な〈態度の変更〉である。しかも彼は、文学者の派遣が、文学者自身の「積極的な思想統制」につながる、と主張する。文学者を「日本人」「国民」と一体化させることで、文学者による戦争／戦場の表現を解禁しつつ「統制」しようとしているのだ。また、小林の議論は、戦場の当事者の語りにも一定の制約を課すものでもある。先に見た「杭州」の「火野君」の姿を思い出そう。戦場が「異常」であることは自明である。だが、たとえそうだとしても、語りにおいて戦場での狼狽や恐慌、興奮や戦慄、自己崩壊の瞬間等々が直截に表現されるべきではない。軍人はあくまで冷静で胆力ある存在であるはずなのだから。小林は、そのような理性的で落ちついた軍人たちの姿に、「人間らしい」という形容句を節

合させていく（軍人の話『東京朝日新聞』一九三八・七・一〇）。

「支那より還りて」での小林の提言は、ほとんどのちの〈従軍ペン部隊〉計画の発想とほとんど同じである。むしろ、小林のアイディアが採用されたと言いたいのではない。文学者の戦地派遣として帰結した企ては、このときすでに、小林周辺を含む複数の方面から提示されていた。¹⁶むしろわたしが重要と思うのは、小林の提出した発想や表象が、戦場の〈異常さ〉を強調する表現を制約し禁止し、ことさらに日本軍人の冷静さと理性的なありようを人々の脳裏に刻みつけようとした当時の軍や情報当局の方向性と、基本的に一致していたということなのだ。

従軍を終えた小林は、戦場の当事者性の絶対化という論点を維持しつつ、「火野葦平」の存在を強烈に意識して、自説の修整を行った。「火野君」の次のテキストを待ち受ける小林秀雄が作り上げていたのは、このような論理の枠組みだったのである。

4 友情の効用

一九三八年八月一五日、小林秀雄は、上海の支軍報道部にいた火野葦平宛てに手紙を書いた。『麦と兵隊』掲載をめぐる文藝春秋社側とのトラブルにかかわるものである。¹⁷

発端は、火野の最初の従軍記『麦と兵隊』が、『文藝春秋』ではなく『改造』に掲げられたことである。このときの火野には発表媒体を選ぶ資格はなかったが、それを知らない菊池寛は、戦地の火野に宛てて違約を難詰する手紙を送り付けた。¹⁸いかにも菊池らしい直情さだが、「面倒なことにこの件は、『都新聞』『大波小波』欄でのゴシップとなってしまう。曰く、芥川賞受賞決定以後火野の代理人役を務めていた中山省三郎が『文藝春秋』に冷遇されたので、かねてから火野の著作を熱望していた『改造』にお鉢がまわったと噂されている」と（水鳥足太郎「麦と兵隊」問題 作家対雑誌の関係）一九三

八・八・五)。この手のゴシップの多くがそうであるように、この記事もすべてが捏造ではないからやっかいなのだが、『都新聞』の紙上には、一日おいて「文藝春秋同人」を名乗る匿名の反駁が載り（「麦と兵隊」問題について）一九三八・八・七）、火野本人も、私信を公開するかたちでの弁明を余儀なくされた（「麦と兵隊」のこと）一九三八・八・一二）。困じ果てた火野葦平は、この時点では彼にとって唯一の有力な文壇の知人だった小林秀雄に、菊池への取りなしを頼んだようなのだ。

そんな火野の申し出に対し、小林秀雄はじつに懇切に対応している。上海でやきもきしていただろ火野が、「文壇はうるさい処だよ。併しちゃんとしている人はちゃんとしているのだ」とか、「こちらの事なぞ気にしないで大いに書いてくれ給え」という小林の字を目にして、どれだけ安心したことか。二日後の消印がある書簡で小林は、この直後に菊池と久米正雄に事情を説明する手紙を書いたこと、「雑誌の商売上君の原稿をどう扱うかは又別問題」なのだから、「今書いている戦記」はとにかく文藝春秋の佐佐木茂索宛てに送るべきことを書き送っている（これが『土と兵隊』である）¹⁹。

だが、火野葦平が小林秀雄を頼りにしたのは、こうした人間関係レベルのことだけではたぶんない。というのも、『麦と兵隊』以下の〈兵隊三部作〉には、小林のテキストに対する応答と覚しき記述が見え隠れしているのである。たとえば、『麦と兵隊』の前書きの一節である。

私は今度の支那事変に昨年〇月〇日光輝ある動員を受けて出征し、十一月五日、杭州湾北沙から敵前上陸をしましたが、その時、我々の生命を狙う弾丸の中を初めて潜ってから、爾来、相当の激戦の中に置かれ幾度となく生死の巷にさらされながら、不思議にも幸い一命を全うしてきて、今も尚、光輝ある戦場に身を置いているものであります。私は戦場の最中であつて言語に絶する修練に曝されつつ、此の壮大なる戦争の想念の中で、なんにもわからず、盲目のごときになり、例えば私がこれを文学として取り上げる時期が来ましたとしましても、それは迥か先の時間のことで、何時か再び

故国の土を踏むを得て、戦場を去った後に、初めて静かに一切を回顧し、整理してみるのでなければ、今、私は、この偉大なる現実について、何事も語るべき適切な言葉を持たないのであります。私は、この戦争について語るべき真実の言葉を見出すということは、私の一生の仕事とすべき価値あることだと信じ、色々な意味で、今は戦争については何事も語りたくはないと思っていたのです。(傍線は引用者)

誰が、どんな立場から、どのように戦争を書くのか。『麦と兵隊』と題されたテキスト全体の枠組みと語りのスタンスについて言及したこの部分に、いかにも小林的な語彙が散りばめられていることを見逃すべきではない。火野は『麦と兵隊』は「もとより小説では」なく、「地味で平板で退屈な従軍日記」だとした。「この戦争について語るべき真実の言葉」はすぐには見出すことができず、自己の体験を「文学」化するのには「迥か先の時間のこと」だと書いた。こうした構えは、「作家達は、自分の経験を時間にかけて発酵させるめいめいの深海を持っている」のだから、この「事変」がすぐに「文学的表現」を獲得することはない、戦争に対する感想と違って「戦争文学が現れるのは、世人が戦争を忘れかゝった時まで待たねばならぬ」とした小林の過去の発言（「文芸時評」）と明らかに通じている。また、火野が戦場体験を「言語を絶する修練」と表現している点も重要だ。この「修練」という語が、「僕はたゞ今度の戦争が、日本の資本主義の受ける試煉であるとともに、日本国民全体の試煉であることを率直に認め、認めた以上遲疑なく試煉を身に受けるのが正しいのである」と述べた小林「戦争について」の記述を想起させる、という点が一つ。加えて、さきに見た「杭州」で小林が描いた「火野葦平」が、戦場の当事者であっても戦争体験の言語化は難しいと語っていたことも響き合っている。実際、『麦と兵隊』の語り手「私」は、「杭州」に登場する「火野葦平」というキャラクターを逸脱していない。質朴で、決して雄弁ではないが、自分の生命が危ぶまれるような場面でもあくまで平静さを失わずに行為できる「兵隊」の姿。これ見よがしの修辭や比喩を排し、情景描写にも多くの文字を費やさない淡々とした語りは、そのような「私」＝「火野葦平」の印象を裏

切ることはない。

しかも『麦と兵隊』の火野は、自分の戦場体験は決して特別なものではない、とも書く。そもそも「戦場では特別な経験などというものはありはしない。取り立てて云うほどのことはなにもない」。戦場はいつでも同様であり、「兵隊」たちは、来る日も来る日もそれぞれの場所で死線を越えている。「苦労というような生やさしい言葉では尽くされないひとつの状態が、最初は兵隊の上を蔽い、次の瞬間には兵隊がその上を乗り超えた」。このような言いまわしは、小林秀雄の「戦というものを最も沈着に健康に人間らしく理解しているものはぎりぎりの処戦を体験している軍人である、軍人だけである、と痛感した」(「軍人の話」)という発言と酷似している。そして、〈戦場の人間性〉という矛盾をはらんだキーワードは、火野の〈兵隊三部作〉全体を貫く重要な主題となるだろう。『麦と兵隊』の有名なラスト・シーンは、「抗日」姿勢を捨てない中国軍の「敗残兵」を処刑しているだろう場面で、「私は悪魔になってはいなかった」と「安堵」する「私」を描いていたのだった。そんなテキストを小林は、戦場でも「変わらぬ人間性」を定着してみせた、と称賛していくのだった(「現代日本の表現力」『東京朝日新聞』一九三八・一二・一〇～一二)。一九三九年にも小林は、火野が戦場でも「極めて当り前な顔をして健全に行為している」人間の姿を造型したことを評価する発言を行っている(「事変と文学」『新女苑』一九三九・七)。杭州の街を舞台に、まさしく〈戦場の人間性〉というテーマを火野なりに追究した『花と兵隊』を含め、小林の言葉と火野のテキストとの間に、無視できない照応関係が指摘できることは明白である。

もちろんわたしは、小林秀雄と火野葦平とが何らかの默契を取り結んでいたとか、小林が火野のテキストを方向づけたなどと言いたいのではない。小林には小林の事情があったし、火野にも彼なりの文脈があったことは自明である。火野について言えば、彼は杭州の占領部隊にいた時点から、どうにか日本語の文学言説にかかわる情報を集めようと腐心していた。やがて書くつもりだった戦記テキストの参考とするためだろう、「従軍手帖」には陳万里「支那側従軍記」(『改造』臨時増刊、一九三七・一一)や、リリー・アベック「南京脱出記」(『文藝春秋』一九三八・二)を読んだ形跡がある。だが、

最前線でないとはいえ、いまだに散発的な抵抗が続いていた杭州で火野が、同時代の日本語の言説をどこまでフォローできていたかは疑問である。そんな火野にとって、芥川賞を携えてきた小林が、きわめて有力な情報源と映ったことは確実だ。しかも火野葦平は、眼前にあらわれた批評家を、自作にとって決定的に重要な宛先と意識したはずである。それは新進作家なら誰もが持っただろう野心とも言えるし、東京文壇の中心ににじり寄るための彼なりの選択だったかも知れない。ともかく、火野の〈兵隊三部作〉、わけても『麦と兵隊』は、軍や情報当局を含むさまざまな力の線が引き合う中で書かれたテキストだった。その際火野は、小林秀雄の語った言葉と書いた文字を自分なりに翻訳しながら、〈戦場を書く〉スタンスを固めていったのではないか。その意味では、小林秀雄は兵隊作家「火野葦平」をプロデュースした一人でもあった。小林秀雄からしても、戦場の当事者としてあらわれた火野葦平という作家や、彼が紡ぐ言葉をどう受け止めるかは、批評家として決定的に重要な問いだったはずである。だから小林は戦地に向かい、火野と会話し、当時の東京文壇ではまだ断片的にしか伝えられていなかった「火野君」の像を提供してみせたのだった。やがて一九三八年七月末、『改造』に『麦と兵隊』が掲げられ、ほぼ手放して称賛されるベストセラーとなった際、小林はテキストに、まちがいはなく自分の言葉の反響を看取したはずである。その余韻も醒めやらない八月下旬には、いわゆる〈従軍ペン部隊〉計画が発表される。その際、かつて小林が語った言葉をまるで口移しにするように、作家たちを派遣はするがすぐに何かを注文しようとは思わないと語る軍や政府関係者の姿が、彼の見聞に届くことになっただろう。

わたしが思うのは、戦争の始まりにあたって自分は「聖者でもなければ予言者でもない」と記した小林が、こうした情況に鑑みて、自らの見通しの確さ、自らの言葉の通用性に少しでも酔うことはなかったらうか、ということだ。自分の思考とこの社会の動きとが同調してしまっているという認識から来る、ある種の全能感のようなものを感じることはまったくなかったのだろうか。小林の聡明さをもってしても、そうあってほしい人間や社会の姿とのかかわりよりも、短期的な見通しの正しさのみを優先させて競い合うような、消費される〈知識人〉という位置への誘惑を感じることはなかった

のか。

そのことを確かめるには、戦時下の小林にかんする別稿を用意せねばなるまい。

〔付記〕 火野葦平関連資料の閲覧・調査にあたっては、資料寄託先である北九州市立文学館の方々のあたたかいご支援をいただいた。改めて謝意を表したい。また、本稿は科学研究費（若手研究(B)）「言説の生Ⅱ政治——戦時下日本語文学の総合的研究」、大妻女子大学戦略的個人研究費「日中戦争の記憶と表象に関する総合的研究」による成果である。資料の引用にあたっては、適宜通行の表現にあらためている。

注

- (1) 山城むつみ『小林秀雄とその戦争の時』『ドストエフスキイの文学』の空白（新潮社、二〇一四）。
- (2) 『文藝春秋』は、第六回芥川賞発表にあたって、受賞者である火野が「出征中」であることを繰り返し強調していた。詳しくは五味淵「ペンと兵隊——日中戦争期戦記テキストと情報戦」（紅野謙介ほか編『検閲の帝国 文化の統制と再生産』（新曜社、二〇一四）を参照。また、松本和也「事変下メディアの中の火野葦平——芥川賞『糞尿譚』からベストセラー『麦と兵隊』へ」（Intelligence）六、二〇〇五・二）は、芥川賞発表以後のメディア言説が、火野をめぐる「期待の地平」を形づくっていた様子とあつげている。
- (3) のちの回想で火野は、小林秀雄が芥川賞授賞者として杭州に来ると聞き、「誰か無名の従軍記者が持参するものと思いこんでいた」ので「びっくりした」、「私は小林氏を尊敬していたが、いささか怖くも考えていたので、待つ気持のうちにも、固くならざるを得なかった」と書いている（『解説』『火野葦平選集 第一巻』（東京創元社、一九五八）。
- (4) 河上徹太郎「解説」（『新訂小林秀雄全集 第四巻』新潮社、一九七八）。
- (5) 高見澤潤子「兄・小林秀雄」（新潮社、一九八五）。
- (6) 白石喜彦『石川達三の戦争小説』（翰林書房、二〇〇三）。
- (7) 『生きてゐる兵隊』の発禁処分をめぐっては、小林の発言と同日付けの『都新聞』「大波小波」欄で、作家の想像力の萎縮を心配

するコメントが投げかけられている（戦争の描写）。小林の発言は、この筆禍事件に対する最も早い反応の一つだった。

(8) 松本和也『昭和一二年の報告文学（ルポルターージュ）言説——尾崎士郎を視座として』（『文芸研究』一七七、二〇一四・三）。

(9) 森本淳生『小林秀雄の論理 美と戦争』（人文書院、二〇〇二）。

(10) 藤原彰『南京の日本軍』（藤原書店、一九九七）は、陸軍省が行った調査をもとに、「当初の中国戦線の兵の大多数は予後備兵、とりわけ年齢の高い後備兵であった」と指摘している。火野葦平＝玉井勝則は三〇歳で召集されたが、彼が所属した第一八師団は後備兵を中心に編成された特設師団だった。このとき三五歳だった小林の同世代も、少なくない数の人々が動員されていたのである。

(11) 注(9)、森本前掲書。

(12) 鶴島正男「葦平回廊2 従軍手帖（杭州1）」（『敍説』II—2、二〇〇一・八）。引用にあたっては、読みやすさを考慮し、改行の位置を改めている。

(13) 星加輝光「小林秀雄と火野葦平——「麦と兵隊」を中心に」（『小林秀雄ノオト』梓書院、一九七九）。

(14) 注(1)、山城前掲書。

(15) 副田賢二「従軍」言説と〈戦争〉の身体——「支那事変」から太平洋戦争開戦時までの言説を中心に——」（『近代文学合同研究会論集5 想像力がつくる〈戦争〉／〈戦争〉がつくる想像力』二〇〇八・一二）。

(16) 〈従軍ペン部隊〉企画の経緯については、五味潤「文学・メディア・思想戦——〈従軍ペン部隊〉の歴史的意義——」（『大妻園文』四五、二〇一四・三）で論じた。

(17) 火野葦平宛小林秀雄書簡（HA2-06804）一九三八年八月一五日付け、北九州市立文学館所蔵。

(18) 火野葦平宛菊池寛書簡（HA2-06840）一九三八年八月一日付け、北九州市立文学館所蔵。

(19) 玉井勝則宛小林秀雄書簡（HA2-06899）一九三八年八月一七日付け、北九州市立文学館所蔵。

(20) 『花と兵隊』における「人間性」の描かれ方については、五味潤「曖昧な戦場——日中戦争期戦記テキストと他者の表象——」（『昭和文学研究』六九、二〇一四・九）で論じた。